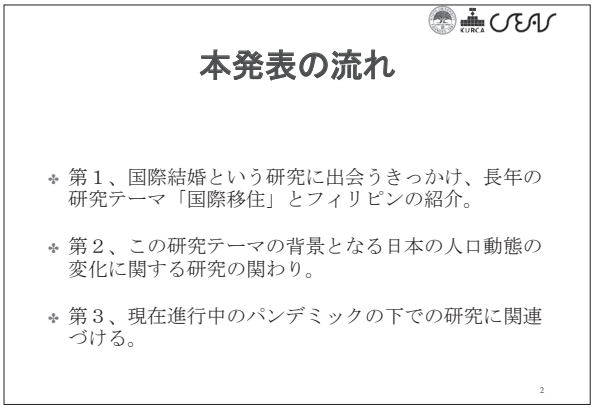
講演 3

共生社会で生きる：日本とフィリピンの間で

Lopez, Mario Ivan（東南アジア地域研究研究所　准教授）

ご紹介ありがとうございました。私は東南アジア地域研究研究所のMario Lopezと申します。私の専門は文化人類学です。本日、このシンポジウムに招待いただきました京都大学附置研究・センターに感謝申し上げたいと思います。

今回、熊本に訪ねることは初めてではありません。実は、熊本は私の第二の故郷です。熊本では長年の研究も行ってきましたし、そして私の妻も、なんと熊本出身です。ですので、本日実家に戻ってきて、私がどういった研究を実施しているかということを皆さんと共有したいと思います。少なかばってん、辛抱してはいよ。どうぞよろしくお願いいたします。

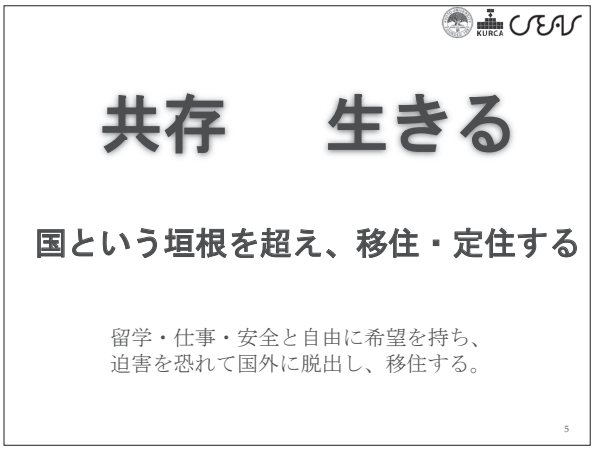


本日は、15年間の研究を大きく三つに分けて30分以内でまとめて発表させていただきます。第一に、まずは国際結婚という結婚に出会うきっかけ、長年の研究テーマ、「国際移住」とフィリピンを紹介させていきたい。第二に、この研究テーマの背景となる日本の人口動態の変化に関する研究との関わりも紹介します。第三は、現在進行中のパンデミックの下で、私が今年実施している研究も関連付けたいと思います。

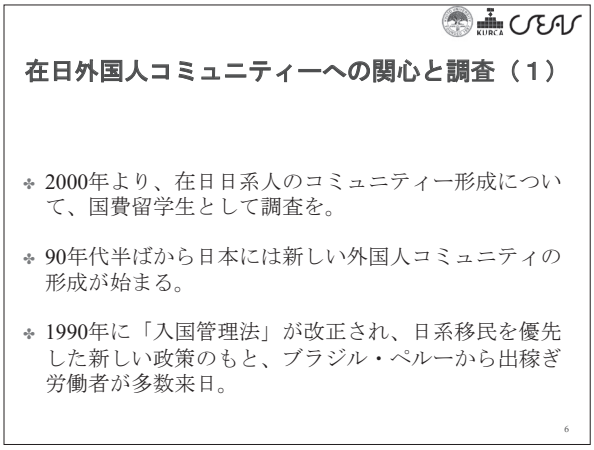
ではパート１に入ります。本題に入る前に、たぶん文化人類学とは一体どんな分野なのか、知りたい方もいらっしゃると思いますので、少し説明させていただきます。

文化人類学者はですね、人類あるいは人間社会を幅広く研究します。要するに、人間条件の核心を解こうとする学問です。この学問を通して、文化のパターン、社会の相違点と共通点、コミュニティのありよう、そして私たちの、例えば、日常生活を支える基盤に影響を与える規範とその価値観を比較的に観察できます。

例えば、何かが起こるときには、その出来事は当事者にとっては何を意味するか。それを問いの出発点にして地域で研究します。地域に住み込んで、住民の言葉を身に付けて、そして参与観察もしてコミュニティの理解を深めます。そして、そのコミュニティを理解した上で、他のコミュニティが理解できるように説明しようとするのです。



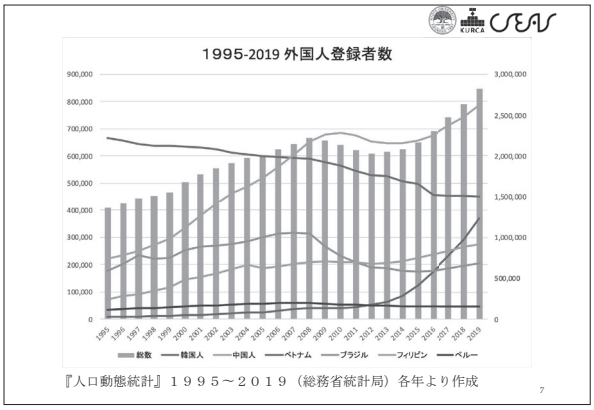
私自身は、例えば、エンジニアのように橋を架けることができません。ただし、文化人類学者としては、人間社会の中の広大な多様性の相互理解に役立つような、さまざまなタイプの橋を創ろうとしています。そうすることで、例えば、私たちはより寛容になって、さまざまな文化の人たちに対する思いやりを育むことができると考えています。



では、本日の発表では、共存すると、生きることについて話をさせていただきます。私たちはみんな、どこで生まれるか決まっています。そしてさまざまな理由と動機で、国境を越えて移住したり、定住したりします。留学または仕事が目的でもありますが、安全と自由を求めて、あるいは迫害を恐れて国外に脱出する移住者もたくさんいます。また、結婚のための移住者も大勢います。

これは私の、長年の一つの研究テーマです。私自身は、イギリスで生まれ育った者ですが、父親はスペイン人です。子どものころから二つの文化圏、言語圏で育てられました。二つの場所で生きることが、多くの移民にとっては、自身と周りの方々に影響を与える経験ですので、人類学なアプローチで長年にわたって、このテーマに強い関心を持っております。

2000年に私は来日して、在日日系人のコミュニティ形成について調査を行ってまいりました。1990年に「入国管理法」が改正された経緯から、1990年代半ばから日本に新しい外国人コミュニティが形成されて、日系人移民を優先した政策のもと、例えば、ブラジルとペルーの出稼ぎ労働者が多数来日しました。このスライド（７枚目）は、過去25年間の在日外国人の登録者数を示しております。今ま



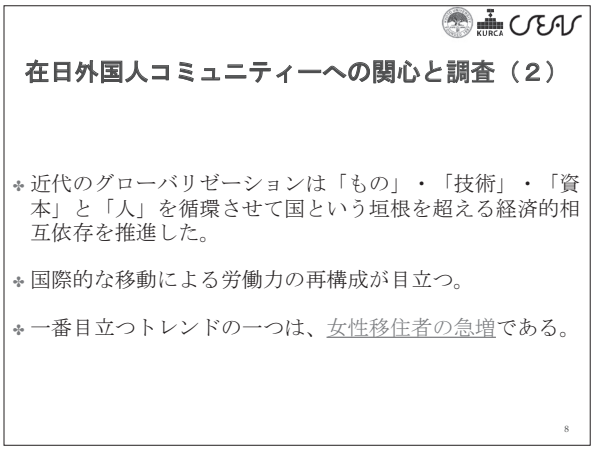
で私が調査してきたのは、黄色い線のフィリピン人です。

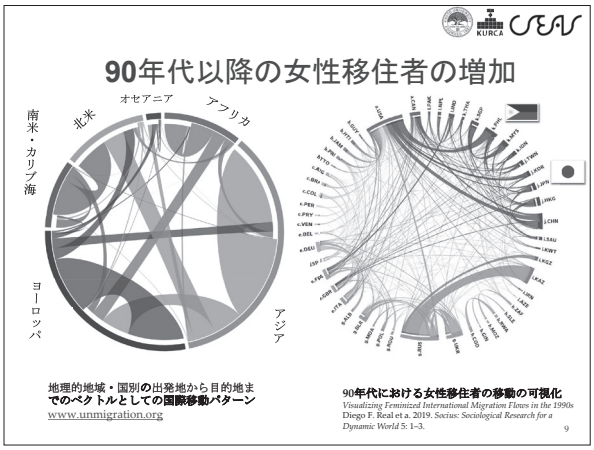
1990年代以降、近代のグローバリゼーションは、「もの」、「技術」、「資本」と「人」を循環させて、国という垣根を越える経済的相互依存を推進してきました。その中でも、国際的移動による労働力の再構成が目立つようになってきました。一番目立つ傾向の一つは、女性移住者の急増です。

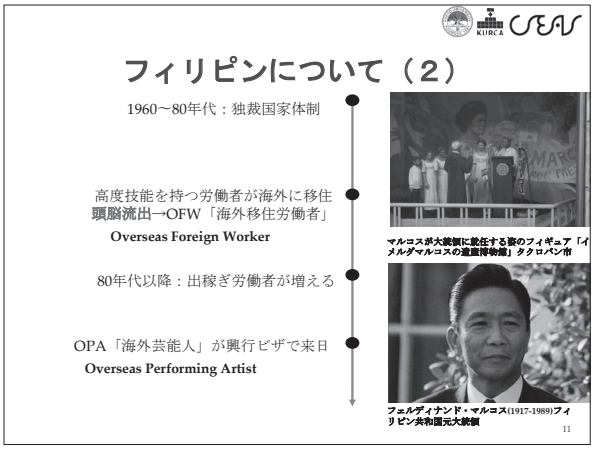
ここのスライド（９枚目）は、二つのデータを表しています。左側は地域間の相互国際移動、そして右側が1990年代における女性による国家間の移動を示しております。線が太ければ太いほど、ここの線が地域間の濃厚な移動を示しております。日本でも、右側のほうにあるのですけれども、フィリピンと日本の旗があります。日本でも女性の移民たちも増えてきました。この傾向を調べるためには、2000年から１年間に３回程度フィリピンに渡って、女性たちが日本へ移住する動向について、もっと知りたくなってきました。

フィリピンに行ったことがある方はいらっしゃいますか。かなりいますよね。フィリピンに行ったことがない方に向けて少し説明させていただきます。フィリピン共和国はアジアの一つの島国であります。現在の人口は１億900万人です。300年以上、スペインとアメリカの植民地でもありました。７千以上の島々を持って、多様な民族、言語、そして文化もあります。人口の９割以上はクリスチャンです。アメリカの影響力によって、国民の大部分が英語を第二言語として日常的に使いこなしています。人類学者にとっては、フィリピンは多様性に満ちた魅力的な島国です。

少し遡りますけれども、1960年代から1980

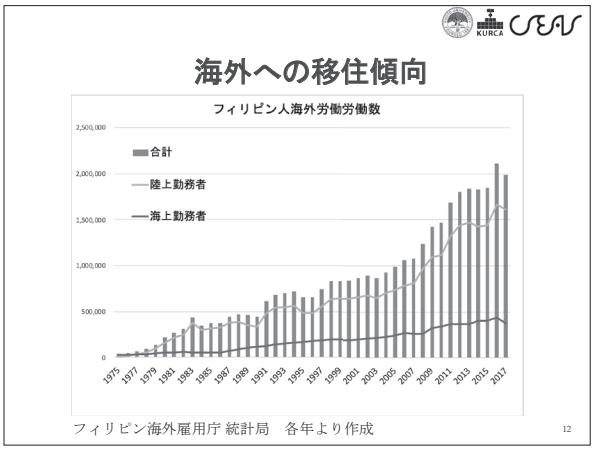




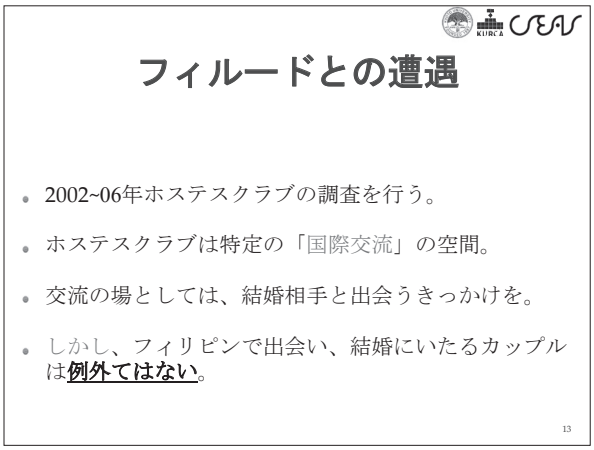


年代まで、フィリピンは独裁国家体制に置かれて、経済不安定のため、人口の１割に相当するフィリピン人が海外に移住します。これは「頭脳流出」と言います。つまり、フィリピンで教育を受けて、海外に出て行ってしまうという現象です。海外で働くフィリピン人労働者は、英語で言うと「Overseas Filipino Workers」（OFW）と呼ばれております。フィリピン社会においては、海外で働いているフィリピン人は重要な歳入源です。

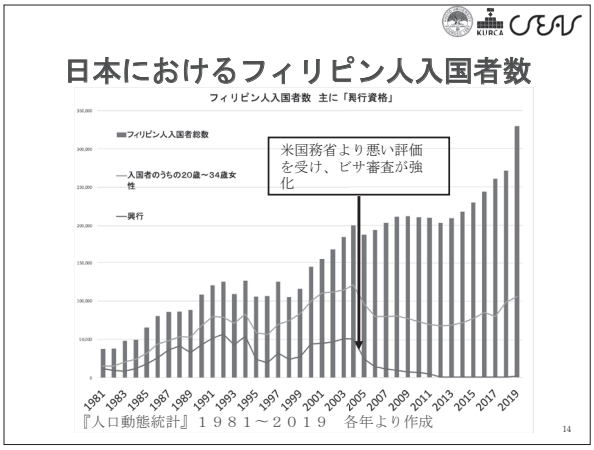
1980年代の初めには、出稼ぎ労働者がさらに増えてきます。中東、アジア、アメリカ、カナダ、さまざまな地域で、高度技能を持つ労働者が出稼ぎに行って、日本でも娯楽の分野においてエンターテイナーも増加します。1980年代の初めには、フィリピン国内の政治状況がまだ不安定でしたので、少しずつ日本に出稼ぎに行くフィリピン人が増えてきます。来日するフィリピン人の多くは「海外芸能人」、要するに「Overseas Perfoming Artist」（OPA）と呼ばれております。興行ビザを持って日本に来ました。



ここのスライドは、フィリピンの海外出稼ぎ労働者の傾向を表しております。緑色の線は陸上勤務者数を表しています。赤い線は海上勤務を表しています。海上勤務というのは、主に２年間契約で、例えばオイルタンカーの仕事に従事して働くフィリピン人を指しています。そのほとんどの移住者はフィリピン人男性です。



先ほど、フィリピン人女性も日本に来日しましたとお話をしましたが。主な来日の目的は娯楽分野で働くことでした。娯楽と言えば、日本全国ほとんどの都市、地方ではホステスクラブなどがあって、そこで働くフィリピン人ホステスと日本人のお客の間で多数の結婚が生まれました。



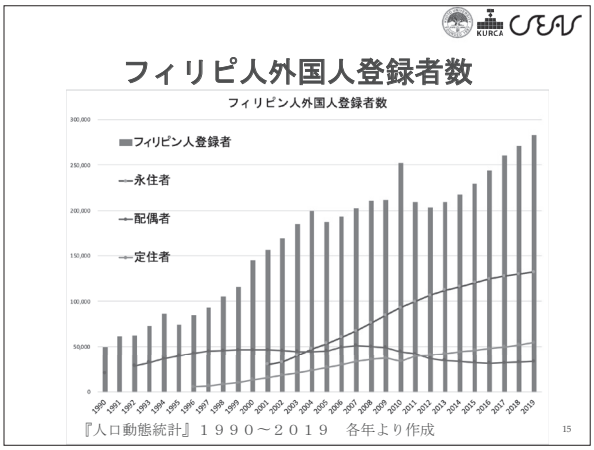
私が2000年の半ばぐらいに、長崎の思案橋と福岡の中洲でホステスクラブの調査も行ったことがあります。ある意味、これらのバーは一種の国際交流の空間として存在しています。そこでの出会いから結婚まで進むインフォーマント、つまり、私の調査に協力して

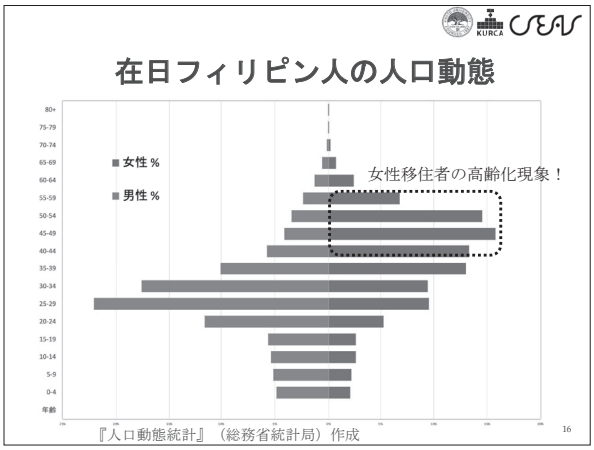
くれた女性の多くいましたけれども、ここで強調したいのは、これらの空間が唯一の出会いの場であったというわけではありません。例えば、出張とビジネスでフィリピンを訪れて出会い、結婚に至ったカップルも例外的ではありませんでした。

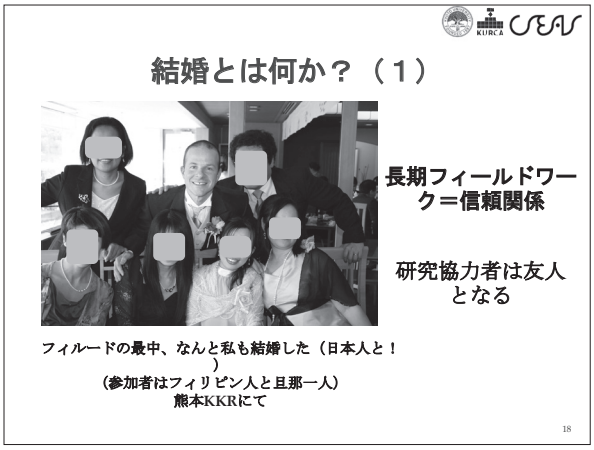
このスライド（14枚目）は、日本への入国傾向を表しています。青色のカラムはフィリピン人の日本への入国者数です。緑色の線は入国者数の20歳から34歳までの年齢層を表しています。このほとんどの方々は女性です。紫色の線は興行ビザの入国者数を示しています。このスライド（15枚目）をご覧になれば、定住者、永住者と配偶者が増えていることが分かります。徐々にフィリピン人が日本社会にも根を下ろしているということが分かります。

最後に、このスライド（16枚目）は来日フィリピン人の人口動態を表しています。右側を見ていただきたいのですけれども、40歳～60歳までの、女性移住者の高齢化が一つの現象として著しくなっております。つまり、本国に帰国しない限り、日本人と共に高齢化していきます。

九州ではどのようなフィリピンコミュニティが形成されてきたかについて、私は2004年から2009年までフィールドワークを行いました。在日フィリピン人の生活基盤を支えるものは何なのか。そして、彼らがそれぞれのコミュニティがどのように地域レベルで影響を与えているか調査を実施しました。調査では、誰が、どこで結婚に踏み切ったかについて、男女双方のライフストーリーから、日本における国際結婚と国際家庭の形成につながりました。この地図（17枚目）は、私が主に調査した地域です。例えば、福岡、日田、大分、別







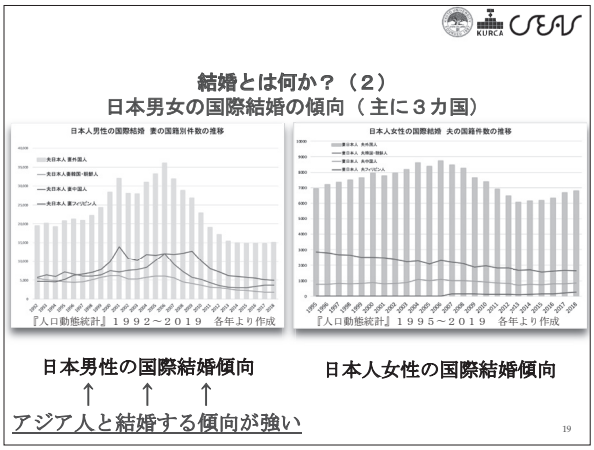
府、熊本の幾つかの地域で３年間ぐらい調査を行いました。

このスライド（18枚目）ですが、だいぶ古い写真で、私の結婚式で撮られた１枚です。研究をしているときはですね、なんと、私も結婚に踏み切っちゃいました。当時の研究の協力者が何人か友達になって、私の結婚式にも参加してくださいましたので、本当に嬉しかったです。ちなみに、会場はここの近くのKKRホテルでした。

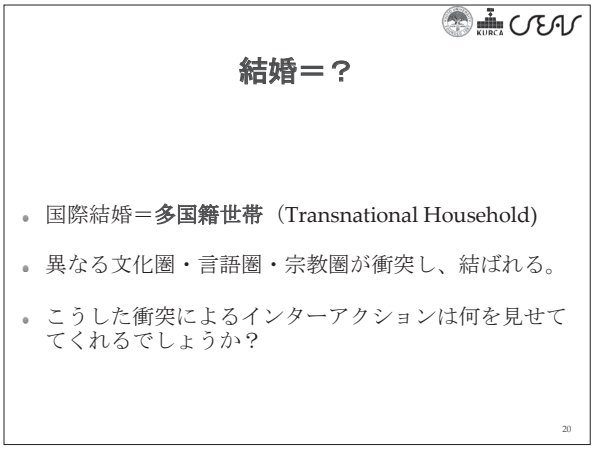
結婚とは何かについて、有意義なインタビューを調査するためには、まずは当事者との信頼関係を構築することが一番大事です。私の場合、歳上の協力者が多くて、私が投げかけた質問に対しては、もう、この人は何だろうって。私は日本人でもないし、私を疑う人がたくさんいました。ですので、信頼関係を築くためには、本当に時間をかけるしかありません。私の場合はフィールドワークが３年間もかかりました。今でも定期的に九州に戻ってきて、当事者を訪問して話を伺っております。

在日フィリピン人は、主に女性ですので、女性に対する研究は当然たくさん行われています。しかし、私の研究の場合、結婚相手である夫に関する調査を行っています。日本における国際結婚の推移の統計を見ますと、日本人男性の国際結婚は1980年代半ばから増えてきて、日本の社会経済的な転換を示していると思います。

このスライド（19枚目）は日本人男性と女性の国際結婚の傾向を表しています。見ていただければ、すぐ分かると思いますが、日本人男性のほうが多いです。たぶん、ここの会場にいらっしゃる皆さんが、日本人が誰と結婚するだろうかと考えると、やはり西洋人と結婚しているパターンが多いのではないでしょうか。ただし、データを見ますと、アジア圏での結婚するパターンが主流です。こうした歴史的な背景の中で、日本人男性がフィリピン人と出会って、二つの国を結ぶ世帯、トランスナショナルハウス（多国籍世帯）の形成にもつながりました。



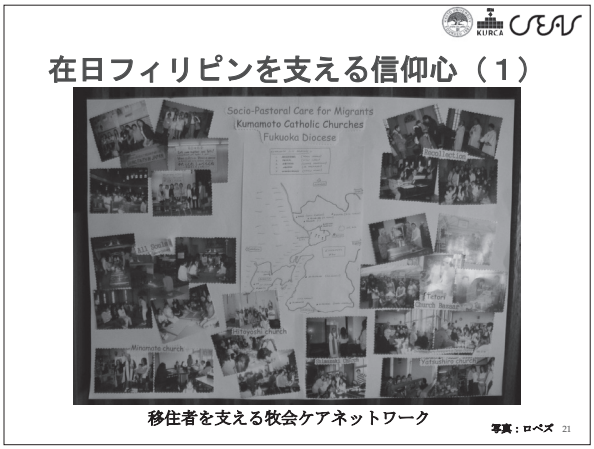
私はこうした背景を調べながら、日本人男性とフィリピン人女性の日常生活に見られる文化的、宗教的インタラクションを観察しました。とりわけ、例えば、夫婦関係がいかに新しい段階に変化していくのか。その結果として、夫婦が地域社会、友人・知人たちとの新しい社会関係をいかに結び直していくのか、日々研究しました。



私がフィールドワークを行いながら、一つ

の大事なところは教会でした。調査対象者はフィリピン人で、ほとんどがカトリックの信者ですので、彼女たちの信仰心が果たす役割について関心を持ちました。具体的に言いますと、彼女たちにとって宗教的自己意識が日本の生活において自己を支えるのに非常に大事です。その意識はまた、夫婦関係に直接的、間接的に大きな影響を及ぼします。

このスライド（21枚目）は、熊本県内における教会ネットワークと在日フィリピン人の活動をまとめて表しているポスターです。一つのイベント会場に飾られて、熊本県内の教会を中心とする活動を表しています。英語で書いてありますが、それぞれの地域の名前が書いてあります。八代とか人吉とか。教会は一つの軸としては、信仰心を支えることだけではなく、コミュニティの意味を問う、そしてコミュニティの形成を祝う場所でもあります。



このスライド（22枚目）は教会活動、また家庭内の風景を表しています。家庭内で飾ったお祈りのものがいっぱいありますけれども。例えば、ここを見ますと聖母マリア（イエスの母マリア）の像があります。そして集会では、みんなが集まって、これは日常生活においては何を意味するかということをみんなで考える会もやっています。

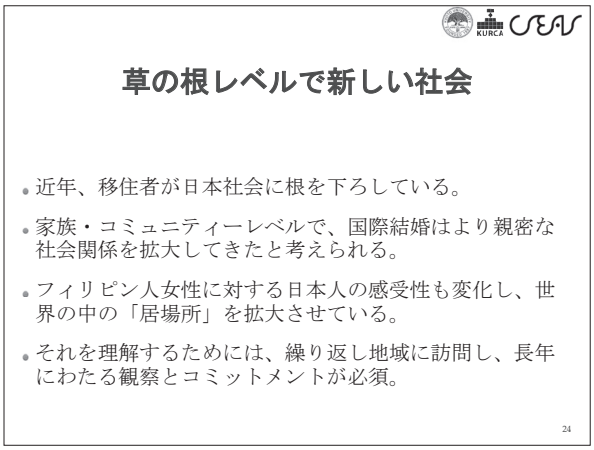
私が調査の家を訪ねますと、玄関に入ると、例えば、聖なるよきイエス、要するにサントニーニョ人形（聖なる幼きイエス）が飾ってあります。居間に入りますと、仏壇ではなく、聖母マリアも置いてあります。自身が抱える信仰心は、日々の生活に影響を及ぼしますし、夫と家族の関係にも大きな影響を与えることは明らかです。自らの信仰と自覚を強めるとともに、少しずつ家庭を変えていきます。

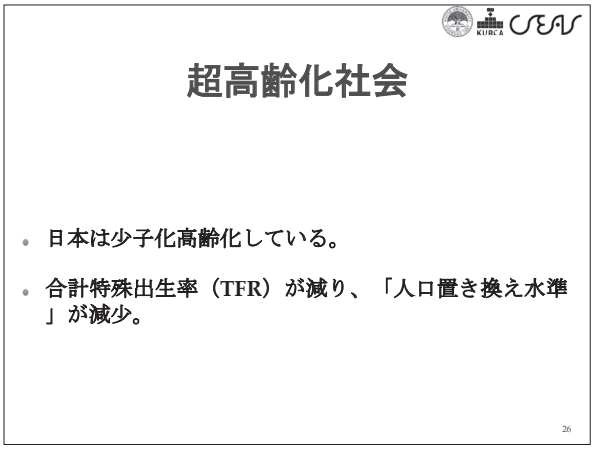
ここで強調したいのは、その家庭において表れるこの信仰心は何十年かにわたって活性化していくプロセスの一つです。これは国際移動によって深められます。

最後に、このスライド（23枚目）はコミュニティ活動の年集会で撮った写真です。ここに熊本、福岡、長崎、佐賀、大分からたくさんのフィリピン人が集まって、子どもたちを

連れていって、長年の在日経験を分かち合います。これは日常の草の根活動を分かち合うチャンスの一つです。このような活動が1980年代から続いているプロセスだと思います。移住者の生活の中で、宗教の重要性をとても感じています。

今までをまとめますと、移住者は家族、コミュニティを介して国際レベルの社会形成に、非常にポジティブな影響力を持つと、私は考えています。女性に対する日本人の感受性も変化しますし、例えば、世界の中の居場所を拡大させていきます。しかし、それを理解するためには、繰り返し地域に訪問して、フィールドワークを繰り返し行わなわなければいけないのです。これが人類学者の調査のスタイルです。この調査テーマは今後も続きます。

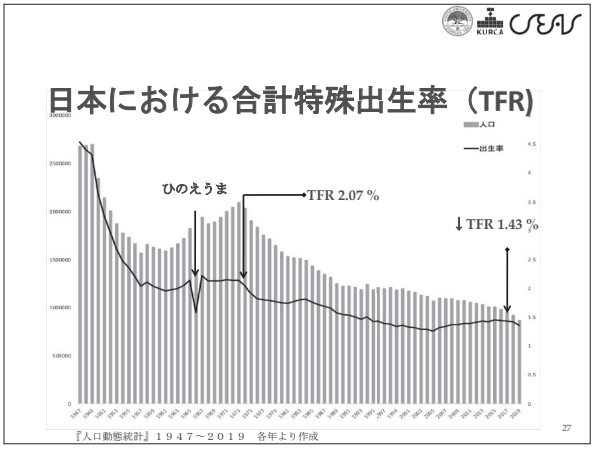




では、第二部に入ります。先ほど、国際結婚というテーマについてお話ししました。どのように人口動態の変化に結びつくのか説明させていただきます。

現在、日本においては少子化・高齢化が非常に大きな問題となっています。1970年代の初めごろから現在まで、例えば日本の出生率がずっと下っています。どのようになっているかというと、スライド（27枚目）を用意しました。私はちょうど1970年代半ばで生まれたものであって、1974年で出生率は2.07パーセントでした。

ただし、ここ現在、非常に低くなっていることが分かります。2050年までには、日本の総人口は１億人まで減少することが予想されています。2007年に日本は超高齢化に突入しました。これから、またさらに高齢化していきます。例えば、2055年までには41パーセント前後になることが予想されています。



こうした中で、最近、介護人材を確保することが、厚生労働省などが検討しています。簡単に説明しますが、これから介護現場では、人手不足という状態が続きます。そこで国のシミュレーションとしては、毎年６万人ぐらいを確保する必要となります。このような現状は何を意味するのでしょうか。例えば、日本はこれから戦略的に、さまざまな移民を受け入れ

て行かざるを得ないのではないでしょうか。それにはフィリピン人コミュニティ形成がヒントを与えてくれるのではないでしょうか。

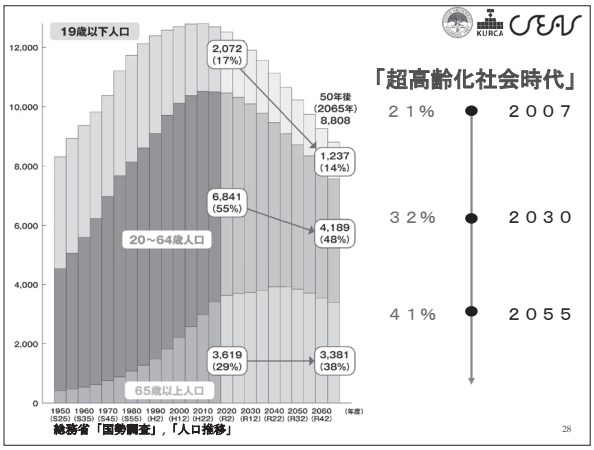
もう少し考えてみましょう。少し遡りますが、2002年で、当時の小泉純一郎元首相は、日本と東アジア、ASEANとの誠実で開かれたパートナーシップについて講演を行いました。その中で、「協力にはアイデア、意見、人との交流が必要である」と、彼は述べました。そしてその後、2006年には、当時のフィリピン元大統領グロリア・マカパガルとの間で、日比経済連携協定（EPA）を締結しました。

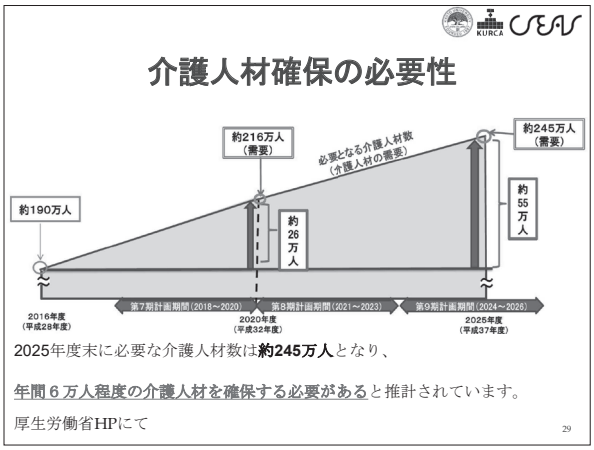
この協定には「自然人の移動」を規定する箇所があります。協定の下で看護師、そして介護福祉士を受け入れることになりました。これに関しては、二つの傾向、トレンドがありました。

一つ目は、2008年以降、EPAを通して、フィリピン、インドネシアとベトナムの３カ国から看護師の候補者が日本に入国して病院で働きながら、それぞれが国家試験にチャレンジして、合格して、日本の病院で働いています。

これに伴って、人不足を緩和するためには、2017年「技能実習法」が施行されて、介護分野が加えられました。2019年度に、例えば、在留資格が変わって、新しく来日する民族が多様化しています。現在は、国際人材協力調査機構（JITCO）の調査によりますと、2020年３月の時点で、介護分野で研修を受けている外国人が約9,000人です。これは全実習生の2.4パーセントを占めています。

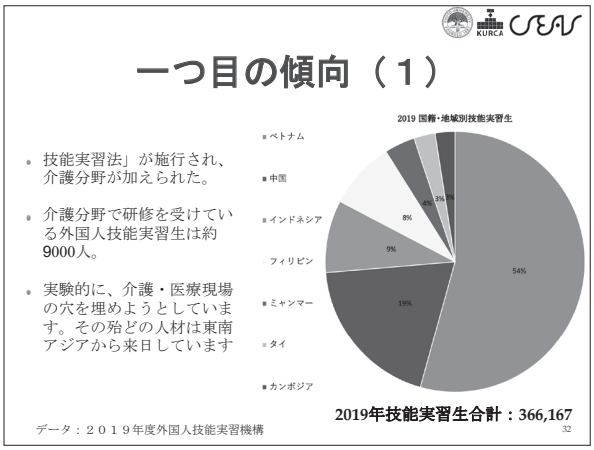
つまり、日本は現在、さまざまなルートで外国人を受け入れて、実験的に看護、医療現場の穴を埋めようとしています。そのほとん



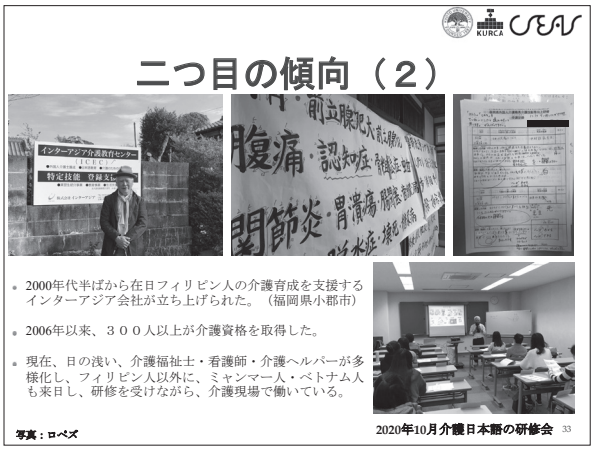


どの人材は東南アジアから来日しています。私が10年前からこの研究テーマに専念して、他大学の先生方と一緒に、日本国内で調査しています。

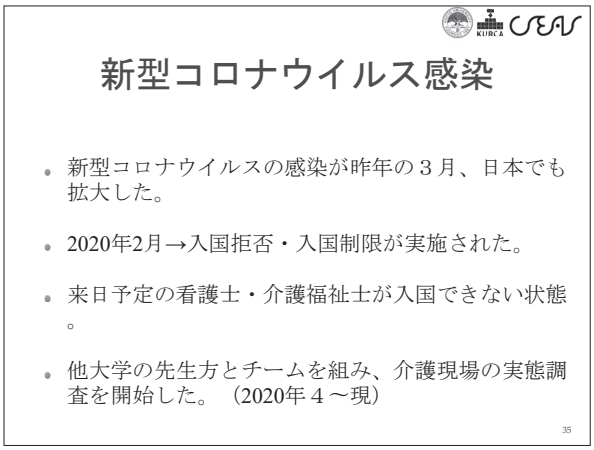
もう一つの傾向はフィールドワークと関わります。福岡県は、例えば、2000年半ばから在日フィリピン人の介護育成を支援するためにインターアジアというような株式会社が立ち上げられました。インターアジアが、フィリピン人の定住者、日本人の配偶者である方々を対象にして、介護スキルを教えています。2006年以来、300人ぐらいが介護資格を取得しました。



現在、例えば、日の浅い介護福祉士、看護師、またはヘルパーが多様化しております。フィリピン人以外に、ミャンマー、ベトナム人も来日しますし、研修を受けながら、介護現場で働いています。福岡は割と面白いところです。一つの実験場としては、たくさんの東南アジア人を受け入れております。



第３部に入ります。このような二つのトレンドがあって、海外から東南アジア出身の医療従事者が日本に入ってきて、コロナウイルス感染が去年、日本でも拡大しました。フィリピン人が勤務する介護現場にも波及しましたし、全国の福祉施設での、複数のクラスターも発生しました。感染拡大防止のため、2020年２月から、例えば、日本では入国拒否と入国制限が一時的に導入されました。



その結果、来日する予定であったフィリピン、ミャンマー、インドネシアからの看護師候補者、介護福祉士候補者が、現在の時点で、出発が遅れています。私は、これはいかに在日フィリピン人や、そして介護現場で働いている外国人に影響を与えるかについては、他大学の先生方と一緒にチームを組んで、介護現場を訪問しました。日本人スタッフと外国人スタッフ、双方にインタビューを行っています。

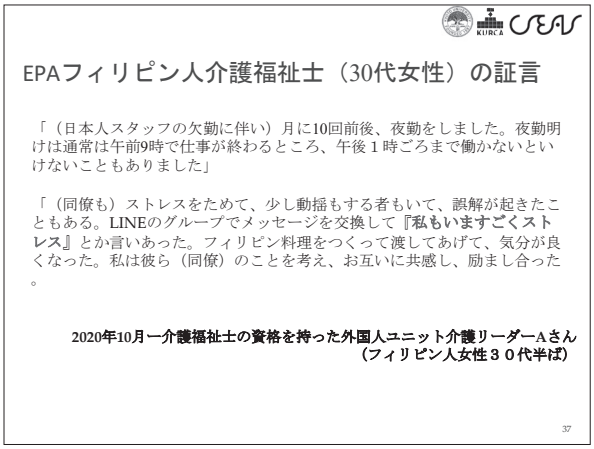
写真（36枚目）は２枚なのですけれども、去年、福岡を訪ねて、福岡県内の一つの老人ホー

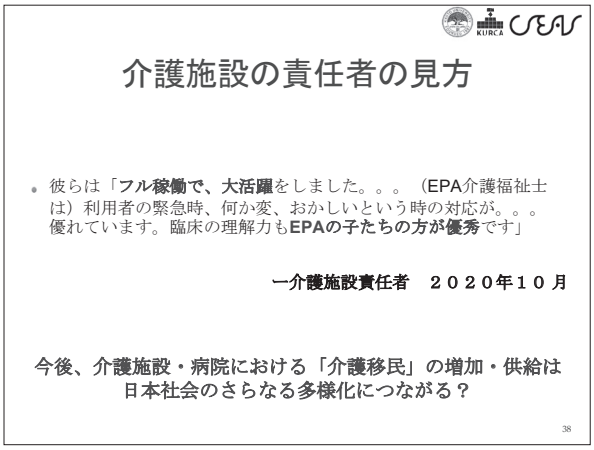
ムに在日フィリピン人と施設側の関係者をインタビューしました。この方は在日フィリピン人で、EPAという枠で来日して、彼女は日本人と結婚して、定住して、今はこの施設で働いています。日本語、英語、両方を使いこなしますし、彼女が日本人と外国人スタッフのリーダーさんにもなっています。

右側の写真ですが、この二人はフィリピン出身の日の浅い技能実習生で、２年前に来日して、今は京都市内の一つの施設で働いています。

EPAで来日して、ある施設で働いている介護福祉士の資格を持った外国の方の話を紹介します。この方が働く施設では、軽症ながら感染者が出ました。その当時、雇用側が、日本人スタッフが２週間程度出勤を停止しました。

一方、外国人スタッフはみんな独身ですので、彼らが日本人の分を含めて勤務を続けました。ご本人がインタビューに応じて、次のように語りました。「夜勤が増えて、長時間働きました。ストレスも溜まりました」。そのストレスで退職した日本人もいました。来日したEPAの仲間たちにもたくさんのストレスもありましたし、彼女はフィリピン料理を作って、友人にお渡しして、気分が良くなりましたし、またその同僚、同じ職場の日本人もお互いに共感し合って深まりましたとインタビューに応じました。

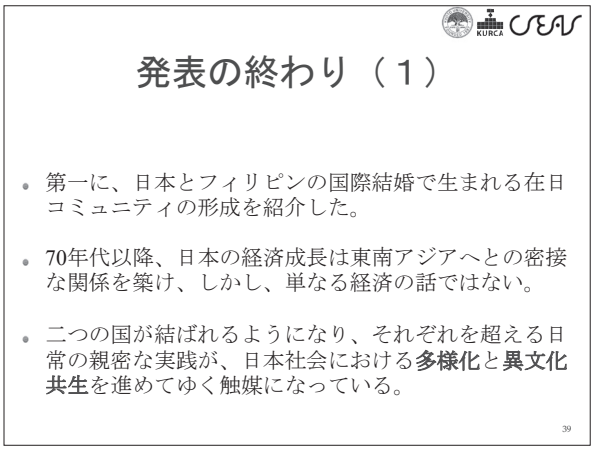




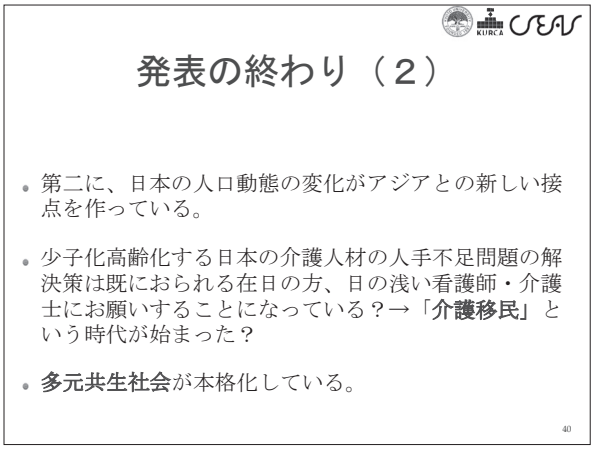
そして、同じ施設で働いている責任者の声なのですけれども、インタビューした結果、「フル稼働で彼女たちは働きました。大活躍しました。彼女がとても、この人たちが優秀だ」と褒めました。これからコロナが収まったら、もっと外国の方を雇用したいと、今、考えております。

今後は介護施設、病院における介護移民の増加、日本社会の更なる多様化にもつながるかなと考えています。

では、少し多めの発表になってしまいました。本日の発表の終わりに入りたいと思います。本日、第一に、日本とフィリピンの国際結婚で生まれる在日コミュニティの形成についてお話ししました。1970年代以降、日本の経済成長は東アジア、東南アジアとの密接な関係を築きました。しかし、これは単なる経済の話だけではありません。二つの国が結ばれるようになって、それぞれを超える日常の親密な実践が、日本社会における多様化と異文化共生を進めていく媒体にもなっております。



第二に、そして、日本の人口動態の変化が、アジアとの新しい接点をつくっています。少子化、高齢化する日本の介護人材の、人手不足問題の解消につながるのか、これから在日する方、日の浅い外国出身看護師、介護士福祉士にお願いすることになるのでしょうか。もしかすると、新しい時代に入ってきて、「介護移民」がこれから増えてくるのか。これは、あたかも多元共生社会を本格化している一つの現象と、私は現在考えています。



これは今年の研究テーマであって、また今年度もこれを続けたいと思っております。長くなりましたが、15年間ぐらいの研究をまとめてお話ししました。以上で、発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。